

事業報告書（令和5年度）

事業名 岡山ニューロダイバーシティプロジェクト～岡山からも『標準』をかえていく～

団体名 みんなのいっぽ ～子どもの晴れやかな成長を支援する会～

担当者名 横西 文代

※活動の様子がわかる写真と説明を必ず添付してください。

1. 活動内容（日時、場所、参加対象者、人数、内容等）

第1回目

『教育はもっと楽しくなる！』

～アセスメントから始まる特別支援教育の視点を通常授業に活かしていこう！～

※実際の事例を題材にした事例検討会を開催し、科学的手法で支援方法をみんなで考える校内研修。

講師：山田充先生（大阪市教育委員会インクルーシブ教育推進室 通級指導アドバイザー）

日時：2023年11月1日 13時30分～17時

場所：岡山市立津島小学校

参加対象者：教員42名

人数：37名（参加対象教員42名のうち、体調不良や出張で不在のため、5名欠席）

内容：岡山市立津島小学校と協働開催で、津島小学校の全教員を対象に、山田充先生による特別支援教育の一般論についての講演を行なった。その中で、特別支援教育を通常学級に活かしていくためには、子ども一人ひとりのアセスメント（分析）が必要であり、そのアセスメントの重要性について話された。その後、教員が困り感を感じている在籍児童4～5人を選び、授業の様子や普段のノートのコピーなどを用いて、実際にアセスメントをしながら、具体的な支援案を提示しながら研修を行った。教職員内での情報共通理解が必要と考え、児童の実名や普段の学習の様子、苦手としている学習内容も共有し、山田先生にご指導いただいた。本研修は、実際の目の前にいる児童を事例検討の対象にするOJT型の形式を用いた。

※OJTはOn the Job Trainingの略語。マニュアルや机上の研修だけではなかなか身につかない知識やスキルを、実務経験豊かな上司や先輩が、現場での実務を通じて、業務の知識やノウハウを身につけさせる人材教育の手法である。



講師に山田充先生を招聘した理由として、失敗や試行錯誤が許されない特別支援教育には、高い専門性を持ち、かつ教育現場を理解し、保護者との信頼関係の構築に十分な経験を有する専門家が求められているからである。(現在、岡山市において、高い専門性に基づいて個別にアセスメントし、具体的支援案(特に学習支援案)を提示できる人材や窓口がない。)



山田先生は、特別支援教育士スーパーバイザー (S. E. N. S. E-SV) である。S. E. N. S. E-SV は、『特別支援教育士資格認定協会』の認定資格であり、専門家チームの一員として、LD・ADHD 等のアセスメントや個別の指導計画の立案・実施に関して周囲の人たちに指導・助言でき、その地域の特別支援教育のリーダーとして十分な実践歴を持つ特別支援教育の「真のプロフェッショナル」である。山田先生は、特別支援教育推進の支援システム構築と特性に沿った通級指導教室の工夫など、長年現場にて、子どもと教員の指導にあたっておられ、高い専門性をもたれており、関連著書も多数ある。今の日本において教育相談・事例検討における的確な助言をできる専門性の高い先生は数が少なく、S. E. N. S-SV の中でも山田先生はトップレベルの先生であるため、県外からお越し頂いた。

研修では、特別支援教育の基本的な内容から具体的な事例検討の話がされた。**具体的な事例検討では、参加教員が日頃知っている実際の具体例を取り上げているので、イメージしやすく、非常に興味深く学ばれていた様子であった。**山田先生の長年の経験と知識、高い専門性、アセスメントからの事例への助言に対して、参加した教員からは、『あれはすごい。凄すぎる。長年の経験と知識の積み重ねで生み出されているものなので、すぐにできるものではないが、アセスメントの重要性を知ることができた。』『目から鱗が落ちた。』『非常に良い研修だった』などの感想を多数いただいた。

第 2 回目

『子どもを真ん中にみんなで考えて共に成長する 子ども支援相談会』
専門家による保護者の教育相談 and 事例検討会（校内研修）
講師：山田充先生（特別支援教育士スーパーバイザー）

日時：2024 年 2 月 21 日 10 時 55 分～17 時

3 校時 教育相談予定の児童 A、B、C の観察

4 校時 児童 A の保護者の教育相談

昼休み 児童 C のアセスメントと実際の教育指導

5 校時 児童 B の保護者の教育相談

15 時 15 分～17 時 児童 A、B の事例とした事例検討の校内研修

場所：岡山市立津島小学校

参加対象者：保護者 3 名、教員 42 名（生徒指導や出張で数名不在）

内容：専門家によるアセスメントを行い、子どもの実態やその子にあった具体的支援案を保護者が学ぶことを目的として『保護者の教育相談』と、教員が専門家からアセスメントの仕方とそれに基づいた支援案を学ぶ目的として『教育相談の児童を事例検討する OJT 型の教員研修』を二本立てとする『～子どもを真ん中にみんなで考えて共に成長する～ 子ども支援相談会』を岡山市立津島小学校と協働で開催した。

◎保護者の教育相談（3 名の児童の保護者）

津島小学校に在籍する児童の保護者 3 名に教育相談を直接依頼した。教育相談は山田先生と副校長と保護者で行われた。教育相談の児童の学校での様子、テスト、ノート、連絡帳など普段の学習状況や保護者からの幼少期からの現在まで児童の話により、児童のアセスメントが実施された。その結果、子どもの学び方や困難の要因は何なのか、保護者が子どもを理解する方法、具体的な支援内容について山田先生から保護者に詳細な説明がされた。

教育相談に参加された保護者からは、山田先生のアセスメントにより、我が子のことをよく理解できたこと、そして、困り感に対する具体的支援案を知れたこと、支援案を学校と共通認識のもと、すぐに取り組めることに好評であった。今後も、継続的に山田先生に教育相談をしたいとの希望があった。また、教育相談時には、管理職の先生、担任の先生、特別支援コーディネーターの先生、可能なら外部の放課後デイなどで関わって下さる先生など、密室の相談ではなくオープンな場として、子供と関わる多くの先生と一緒に聞いて頂けると心強いとの意見があった。

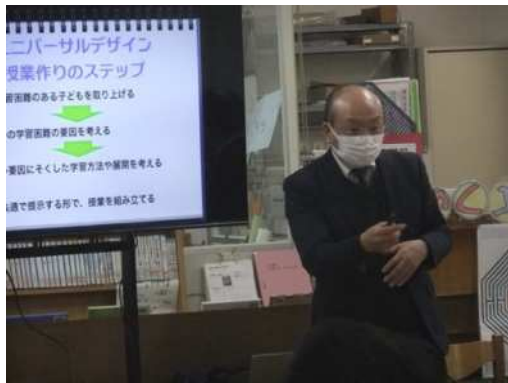
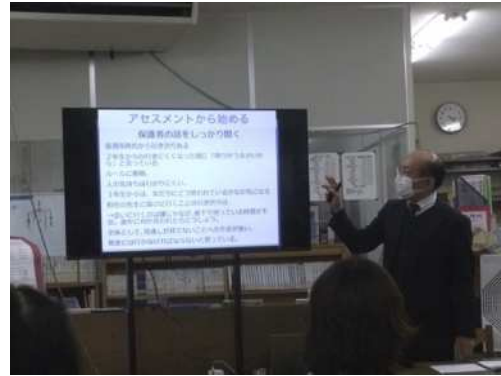
◎教育相談の児童を事例検討の事例にする OJT 型の教員研修

保護者から教育相談を受けた児童を用いた事例検討研修会を行なった。児童の実態に合わせた対応・具体的支援案の解説、教育相談の保護者の思いや学校への願い、生育と現在の様子の関連性などについて山田先生が講演され、保護者の話からアセスメントをして

いく具体的な手法について説明された。また、通常学級で支援が必要な子どもも共に学んでいけるようにするには、ユニバーサルデザインの授業作りの重要性についても話された。

前回と同様に、長年、現場にて子どもと保護者の対応をしてこられた実績と経験に基づいた山田先生の具体的な支援案は、身近な子どもの具体と結びついてイメージが付きやすく、今後の実務に役に立つとの感想をいただいた。

教育相談の児童を対象にしたことで、専門家から直接、保護者と同時に学校に支援案が共有された。これにより、子どもに対し学校も保護者も共通認識を築き、教育支援を家庭と校内ですぐに取り組み、子どもの困りごとを一つずつに適切にみんなで支援することが可能になった。



子どもを真ん中に
みんなで考えて共に成長する

Let's Grow Together
津島小学校

津島 ESDプロジェクト参加校

子ども支援相談会 日時：2月21日 場所：津島小学校

支援計画をみんなで考える相談会

お子さんのアセスメントから始まる教育支援を特別支援教育士スーパーバイザーと学校と共に考えよう！

先生も子どもも笑顔が溢れる学校にしたい！
先生の働き方改革 応援中！

主催：津島市立津島小学校
協賛：津島市立津島小学校 一歩ひとりの成長を支援する会
特別会 岡山ユニバーシティプロジェクト
～岡山からも「働き」を応援して～

GOALS

支援に正確な分析を。
子どもに合った教育支援を
アセスメントからはじめてみよう！！

ASSESSMENT

ANALYSE

お子さんのことで、
こんな心配事ありませんか？

- 漢字が覚えなくて、困っている
- ケンカが絶えない飛び出す・動き回る
- 身の回りのことが自分できにくく、片付けが苦手
- 場に合わない言動があり、集団行動が苦手
- 行き渋りがある
- 宿題をしない
- やる気がない、怠けているように見える
- 学習につまずいている、学習習慣が困難
- 宿題を嫌がる、算数ができない

困っています！
保護者の方のみで悩む必要は全くありません。
困った子は、実は困っている子なのかもしれません。
お子さんにあった解決への道筋を専門家と交えて、学校と共に
みんなで考えていきましょう！

教育相談は、山田先生が対応します。山田先生の高い専門性に裏付けられた的確なアセスメントと助言は、学校と保護者に胸に落ち、共通認識のもと、取り組むことができます。お子さんの困りごとを一つずつ適切に支援する事で、お子さんの困り感は減っていき、子どもも親も笑顔になれることを願っています。
特別支援教育士スーパーバイザーを交えて、学校・保護者と共に考え、みんなで成長していきましょう！

相談できる先生
山田先生(やまだ みつる) 先生
大塚市教育委員会インクルーシブ教育推進室・連絡指導アドバイザー
山田先生は特別支援教育士スーパーバイザーの資格をお持ちで、堺市で過半数で7年、連絡指導員として2年間の経験に携わっていらっしゃいます。正高自治会(はつかい)市教育委員会、連絡指導や教育相談に従事されたら、2013年から現在まで。
主な業務に、「児童の学力を引き出す個別指導と教材活用」など

2. ESDの視点

① 事業を通じて、参加者にどのような気づきや意識・行動の変容があったか

第1回目 『教育はもっと楽しくなる』～アセスメントから始まる特別支援教育の視点を通常授業に活かしていこう!～

アンケートを実施し、参加者の意識・行動の変容などを確認した。

アンケート結果から、参加された多くの教員は、アセスメントの重要性に気付いたようであった。

以下、アンケートの回答の一部抜粋である。

- ・『子どもたちが困っていることに対して支援をしているつもりでも、アセスメントがなければ、むしろ失敗体験をさせてしまっていることに気づいた。』
- ・『問題に感じたときにアセスメントを丁寧にする事が大切だと思いました。同じ名前の特性があっても、人それぞれ悩みや困っている背景が違っていると改めて感じました。』
- ・『子どもの困り感には、必ず原因や理由がある。それを考えずにみんなに同じような支援や声かけをしては、意味がないのだと気付かされた。その子の特性を十分理解する必要を感じた。』
- ・『その子にあった対応をする事が大事だと気づき、改めて、その子自身のことをよく見て何に困っているのか把握したいと思った。』

明日からどのように行動していきますか?とのアンケートの質問に対しては、『アセスメントをしてみる』、『普段の当たり前を褒める』という意識と行動の変容があったことが伺われた。

研修後には、保護者と児童から下記の感想が寄せられ、研修の成果が見受けられた。保護者からの感想の一部抜粋。

- ・『なんか、学校の先生たち変わった?明らかに今までそんなことを言ってくれたことがなかったのに、すごいいいコメントを言ってくれるようになった』
- ・『今まで、全然声かけてくれてなかったのに、子供をよくみているようなコメントをしてくれるようになった』
- ・学習に困難がある児童に対して、『本人が勉強から逃げているだけ、怠けているだけ。もうやれることはありません。』と学校側から回答されるだけだったが、研修後は『アセスメントをする必要がある』と先生方の意見が全員一致し、子どもの見方が明らかに変容した。
- ・『リコーダーの練習を嫌がる生徒に対して、研修前はリコーダー練習をしない子は、ただ怠けているだけだと判断されていた。しかし、研修後は、なぜ、練習を嫌がるのだろうか。その原因を分析する必要がある。と先生から話された。』

児童からの感想の一部抜粋。

・『今日はなんかわからないけれども、めちゃくちゃ褒められて嬉しかった』

・『君は今の君のままでいいんだよと先生が言ってくれて、すごい嬉しかった！』

アセスメントを受け、困りごとを理解されたり、アドバイスをもらえたり、普段の当たり前を褒められたことにより、子どもが自信を少し取り戻せた様子が伺えた。

第 2 回目『子どもを真ん中にみんなで考えて共に成長する 子ども支援相談会』

アンケートを実施し、参加者の意識・行動の変容などを確認した。

◎保護者の教育相談

アンケート結果から、教育相談された保護者から、我が子の状態を理解でき、具体的支援案により、見通しが立てたようであった。

以下、アンケートの回答の一部抜粋である。

・『自分の子どもの「個性」を肯定的に受け止め、本当に自分の子どもについて理解ができ、子どもの成長の見通しや具体的な支援方法を学ぶことができ、自信を持って、子どもに寄り添うことができるので、非常に良かった』

・『これまで相談窓口と言われるところに相談してきたが、子どもにとって今後どうしたら良いのかを知りたいのに、はっきりした回答が得られず、相談しても、悩みが解決されることがなく、モヤモヤが募るばかりだったが、山田先生の高い専門性のアセスメントの結果によるアドバイスは、非常に根拠もあり納得がいくもので本当にありがたかった。』

・『専門家の山田先生が子どもの学校内での様子を踏まえて、学校内での具体的な支援策を学校と保護者と共に山田先生から直接聞いたことにより、共通認識のもとすぐに協力して支援に取り組めるのがとてもありがたい。』

教育相談に同席された副校長からも、『専門家によるアセスメントに基づいた教育相談は、相談時の保護者の様子からも非常に良かったのは、明らかであり、教員にとっても、かなり勉強になった』との感想をいただいた。

・山田先生に直接学習指導をしてもらった児童 C については、これまで誤った指導・支援を受け続けたことにより、2次障害になり、『自分はダメな人間、生きていても意味がない』と発言をし、不登校になっていた。無気力であり、何をするにしても全く意欲がなくなっている状況であった。児童 C に関しては、2022 年 10 月に他団体主催（岡山県 LD 等発達障害親の会 はあとりんく）で山田先生によるアセスメントを実施しており、具体的支援案を家庭と学校で取り組み出していた。その結果、別室ではあるが登校できるようになった。特に学習に対して全く無気力であったが、意欲を少しずつ回復していく変容が見られていた。そして今回の山田先生による直接学習指導により、自分に合った学習方法を知れたので、意欲的に学習をするようになった。

◎教育相談の児童を事例検討の事例にする OJT 型の教員研修

参加された教員からは、下記の感想をいただいた。

・『保護者の方の願いをきちんと聞いて、学校としてできることを一緒になって話し合っ
ていきたいと思いました。ユニバーサルデザインと合理的配慮の意識がなかったので、
これからは意図的に考えていきたいです。』

・『保護者との面談の中で、どんなことが気になっているのかから、子どもの様子を知っ
ていくことやアセスメントの仕方が具体的にわかり、いかしていけそうです。子ども
の『もっと知りたい』『やってみたい』と思う授業の展開を考えていく時、教科として教
えること、特別教育支援の視点で考えることの両輪でしていくことの大切さを意識して
やっていきたいです。』

専門家の解説を受けながら、実際に校内に在籍している困り感のある児童や教育相談児
童を事例にした校内研修は、『子どもの状態分析の手法（アセスメント）をみんなで共通
理解し』、『学校の中での子どもの見方を共有する』ことが可能になり、研修で得たスキ
ルを日々の日常業務の中ですぐ実践でき、教師の経験値を上げることが期待された。

子ども支援相談会后、教育相談された保護者が笑顔になり、声が明るくなっていたのが
印象的であった。困り感のある子どもをどのように支援していったら良いのかがわから
ず悩んでいたが、教育相談後は支援方法が明確化し、家庭だけでなく、学校とも連携し
て支援される見通しが得られたからだと考える。実際の実務上の事例を用いて研修する
ことで、困っている児童についての解決の道筋を学びながら、即座に実践できるため、教
員の学びに直結し、困っている児童も、保護者も救われる研修形式であるため、非常に効
果が高く、満足度が高かったと考えられた。

専門家によるアセスメントにより、子どもに対する見方が変わったことで、保護者も教
員は、子どもに接する態度や教育指導を含めた子どもに接する行動に変革が見られた。専
門家から、個別具体的なアセスメント方法と支援方法について研修を受けた教員は、すべ
ての子どもに質の高い教育を与える方法を学ぶ機会を得ることができた。

② どのように学び合いを取り入れたか

本事業は、共に学び、考え、行動することを目的として行なった。専門家を呼び、困っ
ている児童を真ん中において、子どもの状態と具体的支援案を保護者と教員が共に学び、
具体的にどのように支援をしていくのかを共通認識を育むことを重視した。これにより、
学校だけでなく、家庭内でも同じ支援方法を取り入れることが可能となった。また、専門
家によるアセスメントをうけ、子ども自身も自分に合った学び方があることを知り、自信
を持ち、学習への意欲を高められるように工夫した。家庭内と学校で実践できる支援方法
を学び、当日から行動を開始できるようにした。

③ どのような学びと実践を結び付ける工夫を行ったか

ニューロダイバーシティは、全ての人に当てはまる多様性であり、全ての人々の脳や神経には違いがあり、『みんな違うのが当たり前』『人それぞれ』と理解し合い、共生する考えである。そのため、個性と同様に子どもに合った学び方や、必要な支援方法は、100人いたら、100通り存在する。これまで、支援方法についての研修や講演は多数開催されている。しかし、一般的な支援方法の紹介に関する研修を受講しても、目の前の困っている子どもに、どのような具体的方法で支援をしたら良いのかまでは分からず、実践に結びつけることが難しい状況であった。そのため、本事業では、実務上の困っている児童や保護者が困っている子どもを事例に用いて研修すること、特別支援教育に高い専門性を持ち、かつ教育現場を理解し、保護者との信頼関係の構築に十分な経験を有する専門家を講師にすることで、困っている児童についての具体的な解決策と今後の見通しを明らかにし、目の前の児童に即時実践できるように工夫した。

3. 取組の成果（事業計画書に記載した事業の目的・目標をどのように達成できたか。事業を実施してどのような成果があったか。）

今回の取り組みの目的は、今困っている子どもを救うこと、子どものことで困っている保護者の心配事を解決することであった。それと同時に、困っている子どもを支援したいが、具体的な方法がわからないで困っている教員に実践スキルを身につけてもらうことであった。そして、学校と保護者が連携して、子どもを両輪で支援できるようにすることも目的とした。

これらの目的達成のために、特別支援教育の専門家を招聘し、相談会と研修会を実施した。

相談会では、学習などに困難を抱える子どもに、それぞれの子どもの認知特性(弱みと強み)への理解、学習意欲や自尊心への配慮、長期的な目標と指導方法の設定など、専門的知識とスキルを有する山田先生による子どものアセスメント(分析)を行なった。保護者は、専門家にアセスメントをしてもらい、説明を受けたことで、我が子のことを理解でき、自信を持って寄り添うことができるようになった。子どもは、保護者や学校でアセスメントに基づいた的確な支援がされるようになるので、自分に合った学び方で学ぶことができ、意欲的に学習を取り組み出した。

研修会では、実際の実務上の困っている児童や保護者が困っている子どもを事例として取り上げることにした。これにより、教員は、具体的な解決の道筋を専門家から直接学び、すぐに目の前の児童に実践することができた。

このように、目の前に困っている子どもを通して、一人ひとりの多様性(ニューロダイバーシティ)を学び、一人ひとりを大切に尊重し、学校と保護者と専門家が相互に関わり合い、連携し、責任を持って、子どもに支援することができるようになった。子どもは適切に支援されることで、自分に合った学び方を学ぶことができ、親も教師も子どもも、共に学び合うことができていた。

4. 今後の課題と展望（事業がどのように岡山地域の ESD の取組と持続可能な社会づくりの発展・継続につながるか）

今後の課題としては、下記 2 点が挙げられた。

① 支援教育の専門家が希少であること。

学習困難や集団行動が苦手、不登校など、目の前の困っている子どもに対して、具体的にどう支援したらよいかの問いに、すぐに取り組める具体的な支援案やアドバイスを保護者や教師は知りたいと思っている。子ども一人ひとりにあった教育支援をするには、高い専門性が求められ、今の日本において教育相談・事例検討における的確な助言をできる専門家は全国的にも少なく、実践可能な具体的なアドバイスを進言できる専門家はわずかしかない。日本の将来の教育のために、山田充先生のような特別支援教育専門家の次世代の育成が急務である。そのためにも、本事業である子ども支援相談会を継続開催することで、特別支援教育の充実・拡大と次世代の専門家の育成にもつなげて行けると考えられた。

② 子ども支援相談会の開催の費用をどう確保するか。

この度は、助成金にて開催させていただいていたが、持続的に開催するためには、各学校の PTA の予算もしくは行政レベルで予算を組むなど、費用の確保が必要であると考え
る。

今後の展望

持続可能な開発のための行動や知識、手段や意欲を持つ次世代の子どもが、教育や学習の機会を損失することがあってはならない。しかし近年では、不登校児童の数が上昇しており社会的な損失が大きく、その予防が現代社会の課題の一つである。不登校児の半数以上は、発達障害や境界知能である可能性が高いと報告されている。このような子どもたちこそ、アセスメントによる個に応じた教育支援が必要である。しかし、発達障害の中でも LD（学習障害）は『40 人学級に 3 人』と一番発現率が高いにも関わらず、その存在に気づかれず放置されているケースが多い。そのため、長年にわたり、誤った扱いや評価を受け、深刻な自信喪失と意欲低下をきたし、不登校・引きこもり、非行などの二次障害や自殺をしてしまう。専門家のアセスメントに基づいて、学校と家庭で子どもが適切に支援されることを実現する『子ども支援相談会』は、教育の機会損失を埋め、不登校・自殺の防波堤となると考えられた。

教育は持続可能な社会の実現のために重要な役割を果たす（国際環境開発会議）が、本邦の教員は激務のため不人気であり、離職する者も多いことが問題である。本事業で行なった教員アンケートにて、教師の仕事の中で一番ストレスを感じる事は何か？の質問の回答で、『保護者対応、生徒指導』が多く、教員業務の中で、時間的、精神的にも荷重となるのが、保護者対応であることが伺われた。教員が辞めていく理由としては、授業がうまくできないことよりも、保護者対応がうまくできないことのほうが深刻であり、子ど

もが問題を起こしたとき、担任の対応のしかたが納得できないと保護者から激しく責められ、精神的に追い詰められてしまうことがある。専門家によるアセスメントと具体的な支援方法を学ぶ『子ども支援相談会』を通じて、学校と家庭で連携をしていくことは、教職員と保護者が、健全な関係性の中で、子どもが育つように共に考えていくということをみんなで共有できるため、教員のストレスである保護者対応を軽減することにつながる。そのため、『子ども支援相談会』の開催は、学習環境の変革、教育者の能力構築だけでなく、教員の離職防止に対しても十分有益であると考えられる。

全ての学校で、子ども支援相談会ができれば、学校と家庭と地域の協力の下で教育を強化していき、教員の働き方改革や、教育・学校・教職員の社会的価値を上げることにつながると確信した。今後も、特別支援教育に高い専門性を持ち、かつ教育現場を理解し、保護者との信頼関係の構築に十分な経験を有し、具体的な支援案をアドバイスできる専門家と共に、子ども支援相談会の開催や実際の事例を用いた事例検討を継続的に開催していく必要があると考えられた。